

3. 須津J-第6号墳出土の鉄針について

(1) 針について

分析対象としての針 須津J-第6号墳から鉄針が最少4本（最多で6本）出土した。金属製針は全国的にも古墳から出土することが少なく、形態が単純であるため研究の対象ともなりにくいことから集成も行われておらず、針副葬の意味を考える上で現状では情報が欠如していると言わざるを得ない。ここでは、本墳の評価を行う上で欠かすことができない針の集成を行った上で若干の検討を加えたい。

針の認定 金属製の細長い棒状で、先端が尖るものを「針状金属製品」とし、そのうち針孔が確認されるものを「針」とする。針孔は非常に小さく、鋸化が進行した場合確認できなくなることが想定されるため、奈良文化財研究所遺跡データベース（註1）などを参考に、「針状金属製品」を集成・提示する（第41表、註2）。

(2) 針出土古墳の分布

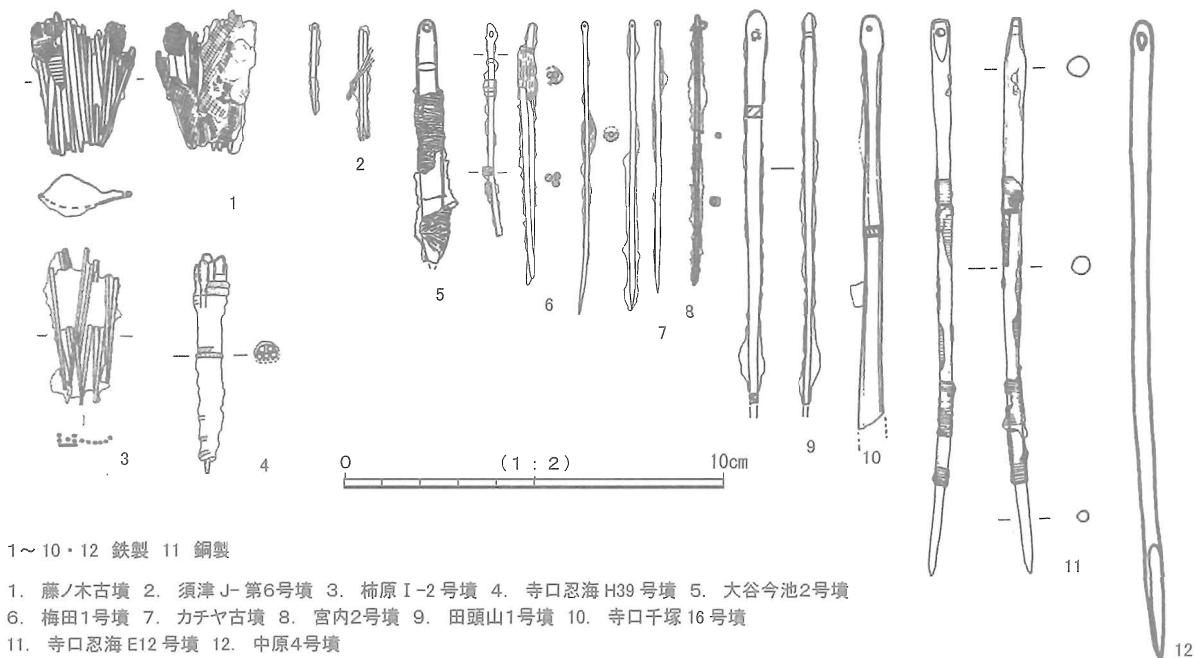
針あるいは針の可能性のある「針状金属製品」（註3）については、現状で第41表に示したように約100遺跡が確認できる。この他に集落などから多数が出土していると想定できる。針状金属製品は、北

第41表 針状金属製品出土遺跡・古墳一覧表（古墳時代）

No	遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬施設	針孔	No	遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬施設	針孔
1	森北1号墳	福島県会津坂下町	後方	41.4	木棺直葬	未	49	タニグチ3号墳	奈良県高取町	円	12	木棺直葬	×
2	廓内横穴墓群	福島県白河市	-	-	横穴墓	未	50	風吹山古墳	大阪府岸和田市	帆立	71	粘土櫛	×
3	中島塙1号墳	栃木県宇都宮市	円	17.8	不明	▲	51	心合寺山古墳	大阪府八尾市	後円	130	粘土櫛	未
4	前橋天神山古墳	群馬県前橋市	後円	129	粘土櫛	未	52	カチヤ古墳	兵庫県豊岡市	円	19	木棺直葬？	◎
5	城山1号墳	千葉県香取市	後円	68	横穴式石室	未	53	中ノ郷・深谷1号墳	兵庫県豊岡市	方	21	木棺直葬？	×
6	山王山古墳	千葉県市原市	後円	69	粘土櫛	×	54	茶すり山古墳	兵庫県朝来市	円	36	粘土櫛	未
7	水神山古墳	千葉県我孫子市	後円	69	粘土櫛	未	55	梅田1号墳	兵庫県朝来市	円	28	木棺直葬	◎
8	上出島2号墳	千葉県坂東市	後円	56	粘土櫛	未	56	梅田3号墳	兵庫県朝来市	円	10	木棺直葬	×
9	原1号墳	茨城県稲敷市	後円	29.5	木棺直葬	未	57	若水古墳群	兵庫県朝来市	古墳	-	-	未
10	西山9号墳	石川県能美市	古墳	-	横穴式石室	×	58	大寺山古墳群	兵庫県香美町	古墳	-	-	未
11	田頭山1号墳	静岡県三島市	円	10.8	横穴式石室	◎	59	崎山14号墳	和歌山県印南町	円	14	-	未
12	須津J6号墳	静岡県富士市	円	10	横穴式石室	◎	60	宮内2号墳	鳥取県湯梨浜町	後円	23	箱形石棺	▲
13	中原4号墳	静岡県富士市	円	11	横穴式石室	◎	61	古郡家1号墳	鳥取県鳥取市	後円	90	粘土櫛	未
14	岩田山21号墳	静岡県藤枝市	円	-	木棺直葬	未	62	桂見2号墳	鳥取県鳥取市	方	28	木棺直葬	未
15	春林院古墳	静岡県掛川市	円	30	粘土櫛	×	63	糸谷3号墳	鳥取県鳥取市	古墳	-	石棺	未
16	東之宮古墳	愛知県犬山市	後方	72	豊穴式石室	×	64	浜坂横穴墓群	鳥取県鳥取市	-	-	横穴墓	未
17	船来山古墳群	岐阜県本巣市	円	-	-	未	65	日下古墳群	鳥取県米子市	円	-	-	未
18	豊飯大塚古墳	岐阜県大垣市	後円	150	豊穴式石室	×	66	上島古墳	島根県出雲市	円	15	豊穴式石室	未
19	龍門寺1号古墳	岐阜県岐阜市	円	10.7	豊穴式石室	×	67	小丸子山横穴墓	島根県安来市	-	-	横穴墓	未
20	石山古墳東崩	三重県伊賀市	後円	120	粘土櫛	未	68	松本1号墳	島根県雲南市	後方	50	粘土櫛	未
21	雪野山古墳	滋賀県東近江市	後円	70	豊穴式石室	×	69	神原神社古墳	島根県雲南市	方	29	豊穴式石室	×
22	湧出山C古墳	滋賀県高月町	長方	16	木棺直葬	未	70	七つヶ谷古墳	岡山県岡山市	後方	45.1	豊穴式石室	未
23	芝ヶ原11号墳	京都府城陽市	後円	56.4	粘土櫛	未	71	金蔵山古墳	岡山県岡山市	後円	165	豊穴式石室	×
24	西山1号墳	京都府城陽市	後方	80	粘土櫛	未	72	月の輪古墳	岡山県美咲町	円	50	粘土櫛	未
25	寺戸大塚古墳	京都府向日市	後円	95	豊穴式石室	×	73	井尻野1号墳	岡山県総社市	方	25	箱形石棺	未
26	井ノ内福荷塚古墳	京都府向日市	後円	46	横穴式石室	×	74	西山26号墳	岡山県総社市	方	20	粘土櫛	▲
27	里ヶ谷3号横穴	京都府京丹後市	-	-	横穴墓	×	75	山の神古墳	広島県福山市	円	14	横穴式石室	未
28	園部垣内古墳	京都府南丹市	後円	82	木棺直葬	未	76	山ノ神第1号墳	広島県府中市	円	12	箱形石棺	未
29	平山古墳	京都府南丹市	円	17	木棺直葬	×	77	赤妻古墳	山口県山口市	後円	40+	舟形石棺	×
30	瓦谷1号墳	京都府木津川市	後円	51	粘土櫛	×	78	畠田遺跡	山口県山口市	-	-	-	未
31	入谷西D1号墳	京都府与謝野町	方	-	豊穴式石室	未	79	国森古墳	山口県田布施町	方	40	類形木棺直葬	未
32	上人ヶ平16号墳	京都府木津川市	方	-	礫敷	未	80	稼塚横穴群	山口県長門市	-	-	横穴墓	未
33	寺口千塚16号墳	奈良県葛城市	横円	18	横穴式石室	◎	81	雉之尾1号墳	愛媛県今治市	後方	30.5	箱形木棺	未
34	寺口忍海E12号墳	奈良県葛城市	円	11	横穴式石室	◎	82	若草町遺跡4号墳	愛媛県松山市	円	7±	横穴式石室	▲
35	寺口忍海H34号墳	奈良県葛城市	円	15	横穴式石室	▲	83	老司古墳	福岡県福岡市	後円	75	横穴式石室	×
36	寺口忍海H39号墳	奈良県葛城市	-	-	横穴式石室	▲	84	鋤崎古墳	福岡県福岡市	後円	62	横穴式石室	▲
37	桜井茶臼山古墳	奈良県桜井市	後円	207	豊穴式石室	未	85	神領2号墳	福岡県宇美町	円	30	粘土櫛	未
38	蘿ノ木古墳	奈良県斑鳩町	円	48	横穴式石室	◎	86	欠塚古墳	福岡県筑後市	後円	45	横穴式石室	未
39	ベンショ塚古墳	奈良県奈良市	後円	70	粘土櫛	未	87	沖ノ島19号遺跡	福岡県宗像市	-	-	祭祀遺跡	未
40	双塚古墳	奈良県桜井市	円	30	粘土櫛	未	88	菖蒲浦1号墳	福岡県太宰府市	円?	-	粘土櫛	未
41	大谷今池2号墳	奈良県大和高田市	円	24	木棺直葬	◎	89	柿原I2号墳	福岡県甘木市	円	16	横穴式石室	▲
42	火野谷山第2号墳	奈良県葛城市	円	14	木棺直葬	未	90	萱藪古墳群1号墳	福岡県志免町	円	20	木棺直葬	未
43	大和2塚古墳	奈良県葛城市	後円	60	横穴式石室	×	91	七夕池古墳	糟屋郡志免町	円	-	豊穴式石室	▲
44	奥ノ芝第2号墳	奈良県宇陀市	古墳	-	横穴式石室	×	92	惣社古墳	福岡県みやこ町	円	28	箱形石棺	未
45	見田大沢1号墳	奈良県宇陀市	後円	22	木棺直葬	×	93	熊本山古墳	佐賀県佐賀市	円	-	舟形石棺	▲
46	後出6号墳	奈良県宇陀市	円	10	木棺直葬	▲	94	市ノ瀬10号	宮崎県国富町	-	-	地下式横穴墓	未
47	北原西1号墳	奈良県宇陀市	後方	31.5	木棺直葬	×							
48	タニグチ1号墳	奈良県高取町	円	20	粘土櫛	×							

*1 墳形 後円=前方後円墳 後方=前方後方墳 長方=長方形墳 檜円=楕円形墳 円=円墳 方=方墳 帆立=帆立貝形古墳 古墳:=墳形不明 「-」=横穴墓

*2 針孔 ◎=針孔あり ▲=針孔は報告されないが出土状況から針の可能性が高いもの ×=報告書では記載なし 未=未確認



第114図 古墳出土の針（一部針と想定するものを含む）

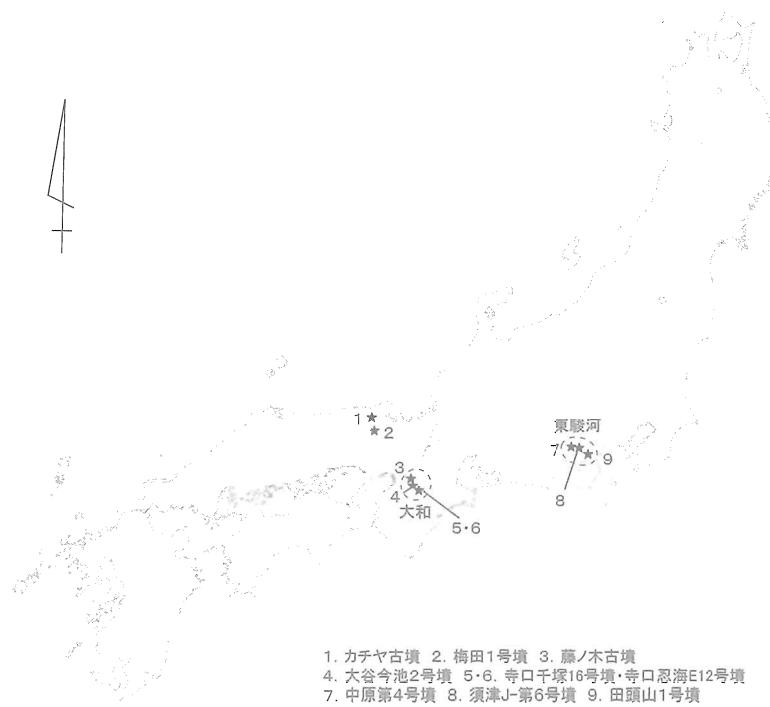
は福島の森北1号墳から南は宮崎の市ノ瀬10号地下式横穴墓まで全国的に確認されている。同一地域に集中することは少なく、奈良の葛城市周辺と宇陀市周辺、東駿河地域など数地域である。

このうち針孔が確認されたものは、須津J-第6号墳、三島市田頭山1号墳（静岡埋文研2004）、富士市中原第4号墳（前田2008）、奈良県寺口忍海E12号墳（柵考研1988）、同寺口千塚16号墳（柵考研1991）、同藤ノ木古墳（柵考研1990）など約10例に過ぎない（第41表、第114図）。この中では、東駿河にほぼ同時期に3古墳が集中することは、奈良県葛城市的寺口千塚古墳群、寺口忍海古墳群など葛城に集中することと同様、特筆すべきであろう。

（3）金属製針の分類

針は用途により長さや断面形状が異なることが想定されるため、それが分類において重要な要素となる。現代では大きさや形状により布用、皮革用、網用などに分類されているが、この分類を古墳時代に援用できるかどうか現状では判断できないため、ここでは分類を行うにとどめ、現代の針の分類との比較は行わない。

長さ 金属製針をまず長さにより分類する。現在では一寸針など尺度に合わせて針の長さが決まっているが、針は非常に細



第115図 針出土古墳分布図（針状金属製品出土古墳は除く）

く先端まで確実に残存するものが少ないため、おおよその分類に留めたい。金属製針は須津J-第6号墳のように5cm未満のもの（a類）、梅田1号墳のように5cm以上10cm未満のもの（b類）、田頭山1号墳や中原第4号墳のように10cm以上20cm未満のもの（c類）、正倉院南倉収蔵品のように20cmを超えるもの（d類）がある（註4）。

断面 針の横断面は須津J-第6号墳のように円形のもの（X類）だけではなく、田頭山1号墳のように方形のもの（Y類）、奈良県大谷今池2号墳のようにやや幅広い杏仁形のもの（Z類）がある（註5）。

材質 針の材質は鉄製、銅製が確認される。なお、正倉院には銀製針も所蔵されており、古墳時代にも銀製の針が存在する可能性がある。この他に骨製や木製針が存在するが、今回は取り扱わない。

須津J-第6号墳の針 須津J-第6号墳出土針は、上記の長さa類、断面X類、材質は鉄製であり、藤ノ木古墳の針と類似する。また、副葬段階で複数が束ねられた状態である点も類似している。この他、寺口忍海H39号墳や福岡県柿原I-2号墳の針状鉄製品も束ねられた状態で長さも同程度である。須津J-第6号墳例のような大きさ・所有形態は古墳時代後期～終末期には全国的に一般的な針の形態であった可能性が高い。

（4）金属製針の変遷

日本列島での金属製針の初現は、弥生時代まで遡る可能性が高い。筆者が確認できたものは現状で古墳時代前期までは確実に遡る。確実に針と断定できるものでは、前期後半～中期初頭の兵庫県カチヤ古墳（b類）があり、兵庫県梅田1号墳（b類）が中期前半に位置づけられる。前期古墳で、針状金属製品が多いことから、今後の調査で針孔が確認され、確実に針と特定できるものが確認される可能性が高い。したがって、前期末～中期前半には少なくともb類は存在し、後期以降はa～c類が存在し、奈良時代には正倉院例からは20cmを超えるd類も存在していた可能性が高い。

また、古墳時代後期以降は少なくとも複数種類の針が存在することから、後期には用途別にさまざまな大きさの針が使用されていた可能性が高い。

（5）針の保有方法

針は細くそのままで保持することは危険である。古墳からの出土状況をみると、梅田1号墳（兵庫県教委2002）、カチヤ古墳（兵庫県教委1983）など多くが木・竹製容器（針筒）に入れられた状態であり、さらにその容器を布などに包んで副葬していたことがわかる（菱田2002）。また、柿原I-2号墳出土例が針だとすれば、11本纏まつたものに薄い板状のものが付着することから木箱（針箱）に入れて副葬されたと報告される（福岡県教委1986）。このように針筒や針箱に納めて副葬されたものが多い。

一方、寺口忍海H39号墳（権考研1988）では、針状鉄製品（針の可能性が高い）を紐で巻きつけて副葬しており、針筒には入れられていない。針束を縛って所持・副葬することもあった。

須津J-第6号墳出土の針は布・木材の痕跡の両者が確認できることから断定できないが、須津J-第6号墳出土刀子などには木質が残存しているが、針にはそれが確認できることから、針筒には入れられず寺口忍海H39号墳の針状鉄製品のように紐を巻きつけて（布袋に入れて）副葬していた可能性がある。

（6）針の意義

①針と被葬者の性別

古墳被葬者と針の関係 上述した針を副葬する古墳で、人骨が残存し性別が明確なのは、奈良県藤ノ木古墳と兵庫県カチヤ古墳である。人骨鑑定の結果、前者は男性、後者は女性であることが判明している。このほか人骨が出土し性別まで判明していることはほとんどなく、現状ではどちらの性別に対しても

の副葬が多いのか述べることはできない。針が副葬された被葬者に女性、男性のどちらが多いかについて、今後類例が増加するのを俟って検討する必要がある。

『万葉集』にみる針保有者 『万葉集』には、防人として旅立つ橘樹郡の上丁物部真根が詠んだ歌に対する妻椋椅部弟女の反歌「草枕 旅の丸寝の 紐絶えば 我が手と付けろ これの針もし」(4420)がある。これは、防人として旅立つ夫が旅路にあたり針を保持して出かけたこと、穴があいた場合には自ら補修したことがわかる。

また、大伴宿祢池主と下吏のやり取りの歌、「草枕旅の翁と思ほして針ぞ賜へる縫はむ物もが」(4128)、「針袋取り上げ前に置き返さへばおのともおのや裏も継ぎたり」(4129)、「針袋帶び続けながら里ごとに照らさひ歩けど人もとがめず」(4130)などからも男性が旅路に際し針を携帯し、男性も針を使用していたことがわかる。藤ノ木古墳の被葬者が実際に針仕事をしたかどうかは明確ではないが、男性にも副葬されていることから、『万葉集』の記事は古墳時代にも遡らせて考えることができるだろう。

針と性別 針が副葬された古墳被葬者と、文献から想定される針保有者を分析すると、針は必ずしも女性のみが保有するものではなく、文献、出土例の双方から男性も保有・使用していたことが判明する。つまり針の副葬=女性の被葬者とするのは早計であろう。

須津J-第6号墳と性別 須津J-第6号墳からは、人骨が出土し、一人以上の成人が埋葬されていた可能性が高いが、残念ながら性別は特定できない。

②針保有の意義

ここでは現状で、針から想定できる被葬者像について考えられるイメージを挙げて今後の検討に当たっての基礎資料としたい。

裁縫技術との関係 正倉院御物（南倉）の針は、「七孔針」と称され、乞巧奠（七夕）の際に裁縫技術の向上を願う儀式に使用されたと考えられている。つまり、針副葬の意義は、裁縫・服飾生産に関する技能保持集団やそれを管掌していた集団を表徴するものであろう。

また、東駿河地域の横穴式石室とその副葬品を検討した鈴木一有氏は、奈良県葛城地域の石室と東駿河地域の石室の共通性とともに、この地域の寺口忍海古墳群や寺口千塚古墳群で針が出土していることとの関連性も指摘し、東駿河地域にはこれまで注目されていた鍛冶技術、馬匹生産だけではなく裁縫技術を含めた手工業生産に長けた集団があったことを想定している（鈴木2010）。

したがって、鈴木氏が指摘するように針副葬が表徴する被葬者像は、針を用いた手工業（裁縫）生産に携わった、あるいは管掌した人物（集団）であることが想定できる。

鉄器生産との関係 富士市中原第4号墳では鍛冶具とともに出土しており、自ら生産したものを副葬した可能性もあり、鍛冶工具などとともに出土した場合は鍛冶生産との関連も想定できる。

玉造との関係 丸玉・小玉などの玉類を紐・糸を通して一連の首飾りや足飾りなどとして製品化していく上で、糸通しとして利用されていたことも想定できる。この場合は、副葬された古墳の近くで玉造の工房などが確認されていることが条件となろう。また、b類以上の長い針で行っていたとは考えにくいため、a類であることも条件となろう。

旅支度 上記した『万葉集』にあるように、針は遠出の旅と関係し、男性でも破けた布を縫っていた可能性が高い。遠出の旅を長距離の移動とすれば、交易等の長距離の輸送などを象徴する可能性も考えられるだろう。

さらに戦国時代には武士が携行し、足にできた水豆の水を抜くのに使用したという。藤ノ木古墳などでは男性に副葬されていたこと、須津J-第6号墳のように針以外では手工業生産に携わっていたことを示す副葬品がないことなどから、服飾生産を管掌するだけではなく、長距離輸送や軍事的な遠征の象徴

であった可能性も考慮しておくべきかもしれない。

(7) 須津J-第6号墳出土針から想定される被葬者像

以上、簡単ではあるが、針状金属製品出土古墳・遺跡の一覧表を示し、針の分類をおこなった上で針の分布傾向や針の保有状況、文献等から想定される針保有の意義について考えた。

須津J-第6号墳では、少なくとも4本のa類の針が纏まって出土した。一人以上の埋葬があつた可能性が高いが、女性が埋葬された確証はない。今後さらなる針出土古墳の分析を進めなければ、早計結論は出せないが、須津J-第6号墳の被葬者像はまず第1には服飾裁縫の手工業生産を実際に行っていたあるいはそれを管掌した集団が築造した古墳の可能性を想定できる。

一方で、想像を逞しくすれば、旅路で針の携帯が想定できることから、針が交易や軍事的な役割を担っていた集団に象徴的に副葬された可能性も想定でき、それを頭の片隅に留めておく必要があろう。

(8) 針出土古墳から見た東駿河

繰り返しになるが、東駿河地域では須津J-第6号墳、田頭山1号墳、中原第4号墳の3基で針が確認されている。東駿河といつても30kmはなれた箇所に散在しており、局所的に集中するわけではないが、裁縫技術と深くかかわりがある可能性が高い針が複数の古墳から出土する点は、裁縫技術を有する集団が複数地域に存在し、活動を行っていた可能性が高いことがわかる。想像の域を出ないが、針の副葬が、自らの職掌や地位を表示するものであると仮定すれば、一般的な服飾裁縫技術ではなく、やや特殊な裁縫技術をもつ手工業技術者集団を表示している可能性も高い。

註

- 1 奈良文化財研究所遺跡データベース（奈文研HP 公開データベース・遺跡データベース）
アドレス <http://www.nabunken.gp.jp/database/index.html>
- 2 なお、「針状金属製品」として集成したもののなかに、玉類などを穿孔するための錐が存在する可能性が高い。錐は弥生時代中期から存在しており、形状も類似することから厳密に区分することは難しい。今回は、先端が尖る細身の金属製品を集成する。
- 3 針状鉄製品のうち、副葬位置や方法により、針状金属製品の近在に農工具や鉄鎌がなく束ねられた状態で副葬されたもの、あるいは容器に数本が納められた状態で副葬されたと想定されるものについては針孔がなくとも針と認定できる可能性が高い。
- 4 正倉院南倉には儀式用の銀・銅・鉄製針が7本納められており、30cmの大型のもののが存在する。古墳時代のものでは確実に20cmを超えるものが確認できないが、この事例から20cmを超えるものが存在する可能性を想定して、d類20cm以上を設ける。
- 5 この他、先端が三角形のものが想定できる。先端三角形の針は現代では「三角針」と呼ばれ、皮革製品に用いられる針である。古墳時代中期以降馬具生産には皮革用の針が必要だったと考えられることから、今後は針の先端の形状を十分観察する必要がある。

参考文献

- 権原考古学研究所 1988 『寺口忍海古墳群』
 権原考古学研究所 1990 『斑鳩藤ノ木古墳 第一次発掘調査報告書』
 権原考古学研究所 1991 『寺口千塚古墳群』
 権原考古学研究所 2003 『大谷今池古墳群』
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 『田頭山古墳群』
 鈴木一有 2010 「駿河東部における無袖石室の史的意義」「東日本の無袖横穴式石室」 雄山閣
 鳥取県教育文化財団 1996 『宮内第1遺跡 宮内第4遺跡 宮内第5遺跡 宮内2・63~65号墳』
 福岡県教育委員会 1986 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 6 上巻
 菱田淳子 2002 「1号墳」『梅田古墳群I』 兵庫県教育委員会
 兵庫県教育委員会 1983 「半坂峠古墳群・辻遺跡」
 兵庫県教育委員会 2002 『梅田古墳群I』
 前田勝己 2008 「中原第4号墳」「東国に伝う横穴式石室」 静岡県考古学会
 渡辺貞之 1979 「針」『世界考古学辞典』

図の出典

第114図 中原第4号墳（前田2007）、田頭山1号墳（静文研2004）、寺口忍海E12・H39号墳（権考研1988）、寺口千塚16号墳（権考研1991）、藤ノ木古墳（権考研1990）、大谷今池2号墳（権考研2003）、梅田1号墳（兵庫県教委2002）、カチヤ古墳（兵庫県教委1983）、宮内2号墳（鳥取県1996）